

文献紹介

Edward C. Banfield,
The Moral Basis of a Backward Society,
 Free Press, 1958

梅 津 順 一

低開発社会の諸問題が幅広い研究者の関心を集めるようになって久しいが、今日の研究の状況は、事実認識の深化と開発政策の跋行という一つの大きなディレンマに直面しているように思われる。一方における、後進社会の諸事実に立脚してその固有な文化を研究した精密な業績と、他方における、経済政策を中心とする有効な開発政策の立案との「幸福な結合」は、到底望むべくもないかの如き状態である。近年学際的研究の必要が提唱される理由もまさしくそこにあるといわなければなるまい。ここで取上げるアメリカ人政治学者の手によりものにされた、ヨーロッパ内の後進地域、南部イタリアの一村落の研究は、9ヶ月に及ぶ現地調査に基いた手堅い業績である。その内容は、「分析と政策のためには、社会の道徳的基礎を戦略的、規制的要因と見做すことが有効である」という独自の立場から展開され、分析と政策の統合が目指されており、今日の我々に対して興味深いものである。

イタリア南部の一後進社会を取扱う著者の視角の独自な点は、通例の後進社会分析とは異って、比較の軸をアメリカの地域社会に求めている点にある。現地を訪れた著者の最大の驚きは、アメリカにならどこにでも見出される、公共的目的をもつ、地域新聞、P. T. A. 職業婦人の会といった組織が、そこには全く欠如しているという点にあった。この率直な印象に基づき、著者は、経済的發展なり政治的進歩に不可欠な「組

織的、協調的行動」が欠如している理由を内在的に解明する、そうした問題を設定するのである。協調的組織的行動は、諸個人の自発的行動によって始めて可能であるから、それを欠如する後進社会の分析は、それを形成しない諸個人の主体的条件——「道德的基礎」から明らかにする必要があり、開発政策もまた、その「道德的基礎」から内在的な克服を促すものでなければならないのである。まず、本書の構成を掲げ次に順を追ってその内容を紹介することにしよう。

序論

- 第一章 印象と疑問
- 第二章 通常の説明
- 第三章 経済生活
- 第四章 階級関係
- 第五章 仮説
- 第六章 実践におけるエートス
- 第七章 原則としてのエートス
- 第八章 エートスの起源
- 第九章 展望

著者は、第一章でアメリカ地域社会と比較しつつ、この後進社会の概観を与えた後、第二章でそうした社会に対する通常の説明を列挙しそれを論評することによって、分析を本格的に開始する。「絶望的貧困、無知、階級対立、小農の保守性、長期間の抑圧、運命論」といった要因による従来解釈を一つ一つ点検しつつ「それぞれの解釈には真理の一面は存在するが、どの一つも説明すべき諸事実とは、十分には整合的でない」と判断する。そして著者は、第五章で、この後進社会に、人々の主体的・道德的基礎に基づく「利己的家族主義」 *amoral familism* のエートスを見出し、そこから社会の全体的解釈を打出すのである。ところで、特定の「感情、価値、信条、観念」に基礎をおく行動様式であるこ

の特有のエートスは、特定の客体的条件の下に醸成されたと考えられており、第五章に先立って、第三章第四章で、まずその条件が明らかにされるのである。

イタリア南部としても孤絶した、鉱工業の全くないこの村落は、農場労働者（約25%）小農・小借地農（約50%）職人（10%弱）商人（数%）公務員（約5%）専門職（1%強）地主（1%強）といった職業構成をもち、水利の悪く荒れた土地における農業が中心である。古代以来の小麦・豆類の単純な輪作とわずかな野菜、および無花果・オリーブ栽培よりなる農業は、その80%が15エーカー以下の自給農場で営まれている。一般的に貧困なこの社会で、とりわけ農民は貯えを殆んど持たず、生活を決定的に破壊する災害、病気などに絶えずおびやかされている。

この社会は社会階級としては、上層階級、商人、職人、および農民に区分される。上層階級であるための条件には、肉体労働をしないことも含まれており、肉体労働が蔑視されていると共に、その階級区分が身分的区分でもあることが知られる。そこでは、上昇の可能性が殆んど閉ざされており、むしろ人々は転落の危険に常にさいなまれているのである。

こうした客体的条件を持つ社会に著者が指摘するところの「利己的家族主義」という、主体的・道徳的基礎に基く行動様式は、基本的に「人々は、〔それぞれの〕核家族の物質的、短期的利益を最大にする、また他者も同様に行動すると想定している、かのように行動する」と規定される。著者はこの「利己的家族主義」が「公共の福祉」の追求、組織的協調的行動、法の遵守とは背反し、公務員の腐敗と非能率を招き、政治的不信、指導者の欠如、投票の乱用を導くことを指摘し、こうした形でこの後進社会に対する基本的な全体的解釈を与えるのである。

つづく第六章、第七章で著者は、この仮説を、行動に現れるかざりでの「実践におけるエートス」と、行動様式を支える「一組の〔判断の〕基準」としての「原則としてのエートス」の二側面から検証する。

諸個人の内面的利害を社会科学的に検討するという困難な課題を、パ

一ソナリティの分析に用いられる Thematic Apperception Test という心理学的方法によりデータを収集する。被験者に一連の絵を示し即座にその解釈を求めるこのテストは、その解釈の内容から彼の感情、価値、欲求、先入見を引用することを可能にするのである。

この方法によるデータを通して著者は、「自己の努力や才覚で何事かをなしうる」ことが不可能な、また極めて貧困な状況で、核家族を単位に生活している彼らは、「勤勉な労働や企業心」を欠如し、家族に決定的打撃を与える災厄の恐怖に常にとらわれており、そこでは、「利己的家族主義」の実践が唯一の行動様式となっていることを確認する。

「原則としてのエートス」として著者が析出する内容は、人々はカトリック教会に所属しているものの、深い宗教意識をもたず、神を気まぐれに恩恵と災厄を与えるものと考え、善悪を家族の利益でのみ考えているという、極めて消極的なものである。行動は、個人の内的動機というよりは、単に「衝動と圧力」の結果と見做される。

続く第八章では、主として、この「衝動と圧力」に基く彼らの行動を、育児の仕方から確認する。

こうした分析を踏まえて著者は、最後にその「利己的家族主義」を克服する政策を、一方では、客体的条件に即して、医療的側面を加味しつつ、経済的行政的施策を通して、人々の利益をその内を含む地域社会を形成すると共に、他方では、教育活動によりそのための主体的条件を育成することを提起し、本書を終えるのである。

我々はたしかに、本書のこうした内容に、有効な開発政策を念頭におきつつ後進社会の内在的研究を試みるという視角の下に、一応の解答が示されていることを見出すことが出来るであろう。だが一面、提起する政策の実現と効果に著者自身悲観的であることから知られるように、本書は、この後進社会の十全な分析を提供しているとは必ずしもいえないように思われる。本書の決定的な問題点は、一後進社会の内在的分析という意図に対して、分析の鍵概念である「利己的家族主義」の内容が、

まだ不十分である点に求められるのではないだろうか。客体的諸条件からは繰返し説明されるものの、「原則としてのエートス」の解釈の弱さに典型的に表れているように、「利己的家族主義」は、その主体的道徳的基礎から十分掘下げられていないと思われるのである。

有効な開発政策を念頭におき、後進社会を内在的に分析するというまともな、しかし困難な課題は、本書がその模範であるような、丹念な諸事実の検討と柔軟な方法的態度の延長上に、一步一步克服されていかなばならないであろう。因みにその場合、次のような方法的視角も留意される必要であろう。第1には、著者自身クランジュ「古代都市」の記述とこの後進社会の比較に興味を示しているが、そのような、歴史的視野からの分析である。「エートスの起源」は歴史的視野の下に始めて十全に明らかにされるであろうし、著者が自明のものとしてこの後進社会に指摘する核家族にも、やゝ異った照明が与えられるであろう。第2に、後進社会の行動様式をエートスとして、主体的条件から内在的に分析する上で、広義の宗教意識が固有に検討される必要があるのではあるまいか。「原則としてのエートス」は、特有の宗教意識によって支えられていると思われるからである。第3に、後進社会を、その克服を念頭におき、このように歴史的・宗教的側面からより掘下げる上で、やはり、本書の視角でもある、近代社会との比較が有効であり、そのためには、近代社会それ自身の文化的条件を、歴史的、宗教的視野を入れて、社会科学的に明らかにし、後進社会との比較の枠組を用意することが必要であろう。

(1975年10月1日)